



◆1



1. ゲゼル
2. ワトソン
3. シュテルン
4. ジェンセン
5. ブロンフェンブレンナー

◆2



1. ボルトマン
2. スキャモン
3. ウェルナー

1. 遺伝と環境の影響

① 遺伝と発達の関係

- 一卵性双生児の階段昇りの実験結果から、(1) は、発達は時期がくれば自ずと発現するものだと考えて遺伝説(成熟説)を唱えた。詳細な発達過程を明らかにした成果は発達診断学と呼ばれ、発達検査の源を作ったという功績がある。
- どのような経験をするかで発達を変えられると考えた(2) が唱えたのが環境説(経験説)である。彼は、行動主義心理学を提唱したという功績が歴史的には大きい。
- (3) は、遺伝と環境の両方の影響が加味され、それが収斂した結果が発達となって現れると考え、発達の輻輳説を唱えた。
- (4) が主張した環境閾値説は、遺伝的に持っている個々の特性が発現するには、環境が一定水準以上であること、いいかえれば閾値を越えることが必要だと主張するもので、遺伝と環境の相互作用を重視した理論と言える。
- 発達とともに関わる人や集団が徐々に拡大することを踏まえて、生態学的発達理論を唱えたのが(5) である。具体的には、母子関係から徐々に身近な社会へと拡大すると考え、マイクロシステム、メゾシステム、エクソシステム、マクロシステムを想定している。加えて時間軸に相当するクロノシステムがある。

2. 身体発達

① 発達の原理

- 動物は進化の過程で、産む子孫の数を減らし、なおかつ成熟した状態で産むように変化してきた。しかし、人間の出産を考えると、産む子どもの数は減らしたものの、未熟な状態で生まれている。このような人間の特異性を(1) は生理的早産と呼んだ。進化の過程に合わせるならば、最初の1年間は母体内にとどまっていることが必要であることから、生後1年間は子宮外胎児期ともいう。
- (2) が表した発達曲線は、生後20年間の身体発達を4つの型に当てはめて図示したもので、胸腺や扁桃腺などのリンパ型、脳や脊髄などの神経型、骨格や内臓などの一般型、睾丸や卵巣などの生殖型がある。
- 発達は頭部から尾部、中心部から周辺部というような方向性を持って進むとしたのが(3) である。

- 発達には、身長が伸びる伸長期と体重増加が目覚ましい充実期を繰り返す反復性、後戻りや飛び越しなどのない連続性があるとともに、発達の速さも到達水準もさまざまであるという（4）の存在が基本である。
- 思春期の頃に起こる身体的な変化の中で、（5）による身長の著しい伸びと、（6）にともなう生殖型の充実、大人としての意識を抱くきっかけとなる。
- 身体発達は時代とともに速く進行している。これを（7）と呼び、成長加速と成熟加速という2つの面を持っている。

3. 乳児期の発達

乳児期に表れる現象

- 新生児期に表れるさまざまな反射を総称して新生児反射（原始反射）といい、足の裏側を刺激すると指を扇状に広げる（1）、唇に触れたものを吸う吸い付き反射などがある。
- 生後すぐに理由もなく微笑む（2）は、数ヶ月経つと誰かがあやしてくれたなどの理由のある社会的微笑に変化する。
- （3）という実験法は、乳児がどのようなものに関心を持つかを調べることができ、誕生して間もない時期から人の顔に興味を持つてじっと見つめることが明らかにされている。
- 生後6ヶ月頃から起こる（4）は、見知らぬ人が近づいたりすると泣き出す行動で、8ヶ月頃にピークを迎えるため、8ヶ月不安とも呼ばれる。

4. 親子関係の形成

親子関係はどう発達していくか

- 生後最初に見たものに追従するという行動が雛鳥性の鳥類で見られる現象をローレンツは（1）と命名した。追従行動が起こるには適切な時期に対象と出会うことが必要であることから、（2）が存在する。
- 生後間もない子ザルを親から離して布製と針金製の（3）を置いた部屋に隔離して行動を観察したハーローは、ミルクの有無といった生理的欲求を充足できることよりも安心感の方が重要であることを示した。
- 子どもと養育者との間に（4）と呼ばれる感情的な結びつきが作られることが健全な発達にとって重要だと指摘したのがボウルビィである。養育者が温かい養育をせずいたために発達が阻害されることがあり、これを（5）と呼んだのもボウルビィである。
- 親子間にどのような人間関係が形成されているかを見極める研究方法が、エンスワースによって開発された（6）法である。こ

4. 個人差
5. 第二伸長期
6. 第二次性徴
7. 発達加速現象

◆3



1. バビンスキー反射
2. 生理的微笑（自発的微笑）
3. 選好注視
4. 人見知り

◆4



1. インプリンティング
2. 臨界期
3. 代理母
4. アタッチメント
5. マターナル・デプリベーション
6. ストレンジ・シチュエーション

- 7. ホスピタリズム
- 8. サイモンズ
- 9. 甘やかし型

◆5



- 1. ハンドリガード
- 2. 第一反抗期
- 3. 第二反抗期
- 4. エリクソン
- 5. 自律性
- 6. 自発性
- 7. 勤勉性
- 8. モラトリアム
- 9. 心理的離乳
- 10. 第二の誕生
- 11. アドラー

◆6

これは、親子と見知らぬ人で遊んでいる場面からの母親の退室と再入室、言い換えれば別離と再会の際に子どもがどのような反応をするかを分析する方法である。

- 生後早い時期から病気で入院するなど養育者と子どもが物理的に離ればなれになった場合でも発達が阻害される。このような状況を**スピッツ**は（7）と呼んでいる。
- 親の養育態度が子どもの性格形成に影響を及ぼしていると指摘したのが（8）で、「支配－服従」「受容－拒否」という2次元で養育の仕方を整理し、その組み合わせによって**支配的&受容的の過保護型**、**服従的&受容的の**（9）、**服従的&拒否的の無関心型**、**支配的&拒否的の残酷型**の4つに類型化した。

5. 自我の発達

① 各成長段階での自我

- 乳児は、機嫌が良いとき、握った自分の手をしげしげと眺める動作をすることがある。これが（1）と呼ばれる行為で、自分自身を意識する最初のエピソードとされている。
- 2歳頃に自我の芽生えにともなって起こる（2）は、かたくな自己主張であるものの、反抗しようという意図はない。
- 思春期に起こる自我の確立にともなうとされる（3）は、強い反抗心が特徴で、社会的慣習や風習なども反抗の対象となり、若者特有の文化を形成する源にもなる。
- 人生を8つの段階に分け、各段階で経験する心理社会的危機を元に自我の発達を論じたのが（4）である。
- 心理社会的危機は、乳児期は**信頼対不信**、幼児前期は（5）対**恥と疑惑**、幼児後期は（6）対**罪悪感**、児童期は（7）対**劣等感**、青年期は**同一性対同一性拡散**、成人前期は**親密性対孤独**、成人後期は**世代性対停滞**、そして老年期は**統合性対絶望**とされる。
- 同一性を確立するのは容易ではなく、大人としての責任や義務を果たすのを一時的に猶予されているのが青年期と言える。このような状況を**エリクソン**は（8）と呼んだ。
- 大人としての自己を形成していくには、（9）によって親への依存を脱却すること、大人として新たに生まれ変わる（10）を成し遂げることが必要となる。
- 劣等感の克服と優越性の追求が人間にとって最大の動機となるとして**個人心理学**を創始したのが（11）である。

6. 認知発達

① 各成長期間での認知の違い

- 認知発達理論を唱えたのがスイスの心理学者（1）である。
- 環境にどのように適応していくのかを認知の枠組みであるシエマという点でとらえ、環境を自己のシエマの中に取り込む働きを（2）、自己のシエマを環境に合うように変化させる働きを（3）と呼んだ。従って、発達とはこの2つの働きがバランスよく均衡化されていることである。
- 感覚運動期（0～2歳）は、感覚への興味により同じ動作を繰り返す（4）が起こることと、物が見えなくなっても存在し続けるという物の永続性を理解することが特徴である。
- 前操作期（2～6歳）は、認知の（5）が強い時期で、アニミズムや実念論、人工論など特有の世界観を有しているが、具体的操作期（6～12歳）になり（6）が図られることによって保存概念を獲得する。
- 形式的操作期（12歳以降）には、具体物から離れて操作することが可能になるとともに、仮説演繹的な論法で思考することができるようになる。

7. 社会性の発達

各成長段階で獲得される社会性

- 心身ともに健全な発達をするためには、個々の発達段階で成し遂げておきたい事柄がある。これが（1）によって指摘された発達課題である。
- 誕生間もない子が発する産声に続き、機嫌が良い時には（2）という発声が見られ、その後に赤ちゃんらしい喃語、そして1歳の誕生日を迎える頃に意味のある初語を発するようになる。
- 他者が何を考えているか、どのような判断をするか、どのような欲求を抱いているか、などを的確に把握するためには（3）の獲得が必須であり、3歳ではほぼ獲得できていることが報告されている。
- 児童期までの道徳性の発達を研究したピアジェによれば、前操作期までは目に見えるものしか判断材料にできない（4）な道徳判断の状態にいますが、具体的操作期に移行することで行為者の意図や目的を判断に活かせる（5）な道徳判断に変化するという。
- 生涯にわたる道徳性の変化をジレンマ事態への対応から研究したのが（6）で、彼によると慣習を考慮できない前慣習的水準、慣習を絶対とみなす慣習的水準、そして慣習を踏まえつつ個人としての判断が可能になる後慣習的水準を指摘した。
- 小学校高学年になると、特定の遊び集団ができる。これが（7）あるいはギャング・グループで、この時期をギャング・エイジという。
- 中学生になると、特に女子では類同性が極めて重視され、皆が同一の特徴を持つことを半ば強制される（8）を形成する。
- 男女混合で多様な特性を持つものが集まり、（9）を形成することができるのは青年期である。



1. ピアジェ
2. 同化
3. 調節
4. 循環反応
5. 自己中心性
6. 脱中心化

◆7



1. ハヴィガースト
2. クーイング
3. 心の理論
4. 結果論的
5. 動機論的
6. コールバーグ
7. 徒党集団
8. チャム・グループ
9. ピア・グループ